

第2回日中病理学シンポジウム

- 1) ハルピン医科大学 セミナー (2007.9.3)
- 2) 吉林大学医学部 セミナー (2007.9.4)
- 3) 中国医科大学 第2回日中病理学シンポジウム (2007.9.7)

蓮井和久
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科健康科学専攻感染防御学講座
(難治ウイルス病態制御学) 分子ウイルス感染研究分野・講師
2007.9.1-9.8

中国東北地方における悪性疾患の研究も、1999年の国際学術(2年)、2001年の基盤研究(B)海外(-2004年)、2004年基盤研究(B)海外(前年度申請、-2007年)、2007年基盤研究(B)海外(前年度申請、-2010年予定)と少なくとも10年を超える長期の研究となることになり、今年度の研究打ち合わせでは、鼻リンパ腫の研究の進行状況の説明に加えて、次に中国での研究の課題となる Epstein-Barr virus 感染症の発生の状況の把握の為に、慢性活動性 EBV 感染症と関連した症例報告を、ハルピン医科大学(ハルピン)と吉林大学医学部(長春)でセミナーとして、中国医科大学(瀋陽)でシンポジウム(第2回日中病理学シンポジウム)として、海外共同研究者の賈心善教授と共に開催することにした。

慢性活動性 EBV 感染症の専門家として、大阪大学病理学の青笹克之教授と鹿児島大学小児科の河野嘉文教授の推薦する琉球大学小児科の岡村隆行先生に参加して頂くことになった。関連疾患の症例報告は、佐藤榮一名誉教授と奥村晃久鹿児島生協病院病理部長にお願いした。また、EBV 感染の研究の紹介を、同分野の榮鶴義人教授にお願いした。

今回の研究打ち合わせ旅行には、敦煌会のメンバーと共に、敦煌会事務局長の野添良隆先生が吉林生まれとあり、吉林生まれで野添先生の同級生である玉利良隆氏と川崎淳子さんが参加された。

従って、日本からの参加者は、研究部門では、蓮井和久、榮鶴義人、佐藤榮一、岡村隆行、奥村晃久、王嘉の6名、敦煌会のメンバーが、佐藤榮一名誉教授の百合子夫人、前南日本新聞ならびに KTS 社長の日高旺先生と久子夫人、野添良隆先生、三瀬美智代さん、玉利良隆先生、川崎淳子さんの7名となった。

それに、海外共同研究者で、今回のハルピン医科大学と吉林大学医学部でのセミナー開催の交渉をして頂いた海外共同研究者の賈心善教授とこの中国東北地方の旅行事情に詳しい瀋陽市旅行社の呉海賓スルーガイドが加わった。専用車のバスの運転者は、この呉海賓さんがバスが故障しても修理の出来る人をお願いして頂いていた。

この旅行の日本からのお世話は、中国国際旅行社福岡支社(担当:折井・若月)にお願いした。

1、ハルピンに向けて出発

旅行一日目（9月1日）は、午前7時39分の新幹線つばめにて、博多へ向かった。博多駅からは、タクシーで、福岡空港国際線ターミナルに向かった。チェックインして、CZ644便は定刻の12:30に離陸し、定刻の20分前に瀋陽空港に到着した。沖縄から実家のある大阪経由で関西空港からの岡村先生も定刻の20分程前に到着した。

午後3時に、専用バスにて、ハルピンに向けて、出発した。

予想以上に、中国の高速道路は貨物トラックで溢れており、更に、トラックの高速道路での走行のマナーは相当に悪く、しばしば並走しており、専用バスも、そのトラックを追い抜くことが出来ない場面が多々あり、トラックの速度に合わせて走ることになった。夕食は、ドライブインのレストランにて、比較的美味しくかった。中国東北地方（満州）の平原は広く、地平線に夕日が沈むが見られた。その結果、瀋陽からハルピンへの専用バスでの移動は8時間余りを要して、午後11時過ぎに、今夜のハルピンの宿（ホリデーイン/万達假日酒店）に到着した。



2、ハルピン（9月2～3日）

翌日は、9時にホテルを出発した。

ソフィスカヤ寺院 ロシア人の作った街であるハルピンの象徴的な建築物であるギリシヤ正教協会を先ず訪ねた。玉葱状の屋根の十字架、壁のイコンは特徴的であった。



ハルピン駅と市街地に残る以前の住宅街 移動中に、中国東方地方北部の平原を走りシベリア鉄道へと続く旧満州鉄道の拠点駅であったハルピン駅を見て、郊外の阿城市に向かった。



亜城市（上京の遺構）：金上京博物館、金大祖陵、土塁による城壁の遺構 ここには、唐の渤海の後にこの地方に建国された金の都であるの上京の遺構(土塁による城壁)が残り、金大祖陵がその近くにあった。金上京博物館には、金が現在の中国の北半分以上を支配した歴史が紹介されていた。この博物館の開設は、満州族や朝鮮族の人々にとっては意味のあるものであったようで、韓国の大統領等も訪問したようである。



黒龍江省博物館 ハルピン市内に戻り、昼食。その後、黒龍江省博物館を視察した。この博物館は、ロシアのデパートであったものと改修して使用しているとあって、ガラス屋根のついた吹き抜けがあり、極寒の冬でも暖かい空間であろうと思われた。ここには、高句麗から“唐の渤海”、そして、“金”と云った歴史の紹介があると共に、この地方から出土した恐竜の骨格化石の展示があった。



松花江(夕日、太陽島) 満州時代に作られた鉄橋 その後、スターリン広場から松花江を眺めた。満州時代に作られた鉄橋や太陽島（中洲で、戦前にはロシア人の別荘があったが、現在は、遊園地となっている）を遠望した。



ハルピン医科大学の金教授らとの夕食



ハルピン市街のロマンチックな夜景

夕食は市中の旅行者用のレストランにて、ハルピン医科大学の金主任教授ら4名と会食をした。

金教授は1992-97年に富山医科大学の北川先生のもとで勉強された。その他の2名の教室員は日本医科大学に1年間、日本医科大学の奨学生制度を利用して、留学した経験がある。金教授の教室は、胃癌、肝臓癌、IgA腎症の研究を行い、月に70例前後の腎生検の診断を行っているそうである。また、金教授は電顕部門に主任を兼任し、3日で腎生検の為に電子顕微鏡検索を行っているそうである。また、娘さんが、今月中旬から、金沢大学の井上章史



教授の下に留学するそうである。

夕食後は、ホテルに戻り、市中央部に位置するホテルから街の夜景を撮影に散策した。20℃前後で避暑の感覚であった。10時頃に、奥村先生が大連経由で到着した。大連でのトランジット中に、大連の市内観光を行えたとの由。

翌日は、9時からハルピン医科大学で午前中がセミナーで、昼食は招待された。



ハルピン医科大学セミナー

旅行3日目(9月3日)は、午前8時20分に、ホテルを出発し、ハルピン医科大学に向かった。ハルピン医科大学の基礎医学院は重厚なロシア風の建物であった。基礎医学院の玄関に、セミナー公示のポスターが貼られていた。9時10分から、基礎医学員の日本友好協力事業で作られた科学院のホールで、セミナーを開始した。



参加者は、金教授の教室員、修士および博士課程の学生、少数の小児科医にて、総勢、30名余りであった。以下の講演を英語で行った。

1. 蓮井の”中国東北地方の鼻 NK/T 細胞性リンパ腫”(9:10 -10:00) : Nasal NK/T-cell lymphomas in the northeast region of China (Kazuhisa Hasui (1), XinShan Jia (2), Jia Wang (1,2), Suguru Yonezawa (1), Shuji Izumo (1), Takuro Kanekura (1) Takami

- Matsuyama (1) , Yoshito Eizuru (1) and Katsuyuki Aozasa (3), 1) Kagoshima University, Kagoshima, Japan. 2) China Medical Univeristy, Shenyang, China. 3) Osaka University, Osaka, Japan)
- 2.岡村の”慢性活動性 EBV 感染症” (10:00 - 11:00) : Chronic active EB virus infection (Takayuki Okamura M.D., Ph.D. University of the Ryukyus Faculty of Medicine Department of Medicine)
- 3.佐藤の慢性 EBV 感染の生検例” (11:00 - 11:20) : Epstein Barr-virus (EBV) associated ulcerative enteritis after stem cell transplantation for plasma cell myeloma (E. SATO(1), Y. TASHIRO (1), H. SHIRAHAMA (1), T. OKUMURA (2) and Y. TAKEMOTO (3). 1) Imakiire General Hospital, 2) Seikyou Hospital and 3) Imamura Bun-in Hospital, Kagoshima, Japan)
- 4.奥村の”慢性活動性 EBV 感染症の解剖例” (11:20-11:40) : Fulminant (fatal) Epstein-Barr virus (EBV) infection of T8+ cells in an adult - Report of an autopsy case - (Teruhisa OKUMURA, (1) Eiichi SATO (1) and Masanari KOMATU (2), 1) Department of Pathology and 2) Department of Internal Medicine, Kagoshima Seikyou Hospital, Japan)

各講演について、参加した病理関係者や小児科関係者からの熱心な質問があった。

張鳳民基礎学院長を迎えた金教授招待の昼食会 昼食は、ハルピン医科大学の賓館のレストランへと招待された。張鳳民基礎学院長、書記の参加を得た。張学院長は、京都大学に留学経験があり、熊本大学の客員教授とのことで、交流がある由。今後の病理学領域の交流を期待するとの話があった。

ハルピン医科大学でのセミナーは、破格の歓待を受けた。

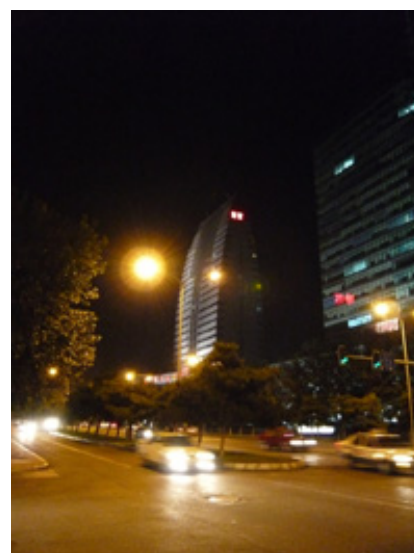


旧日本軍 731 部隊跡 昼食会の後に、バスにて長春に向けて出発した。その途中で、ハルピンの郊外の旧日本軍 731 部隊跡地を見学した。その本部跡には、一つだけ建物が残り、その中に人形やポスター、その他の物の陳列があった。かなりショッキングなものもあり、現代の医学医療人として、ヒューマニズムに基づく医学医療の重要性を再確認した。



3、長春（9月3-4日）

長春のホテル その後（9月2日午後3時頃）、長春に向けて出発した。午後6時過ぎに到着し、ホテルのレストランにて夕食と摂り、長春駅から一直線に延びた幹線道路に沿ったやや郊外の宿泊ホテル（長春/新吉糧大酒店）にチェックインした。周囲を散歩したが、この幹線道路の交通量は相当なものであった。



旅行4日目（9月4日）は、ホテルを8時40分に出発した。

長春映画制作所

午前中は、旧満州時代の特務機関の一つであった映画制作所の跡に、現在の中国で最初に設立された長春映画制作所を訪問した。昨今のテレビブームに押されて、中国でも、映画はかなり劣勢となっているようである。



満州国皇居（偽との表現が中国でされるが、本来の建設予定地に建設されずに、某企業の宿舍を間借し、その後、その宿舍に追加建設されたことから、偽の表現が用いられているようである。本来の建設地は、長春駅から真直ぐに伸びた大きな道の突き当たりであり、現在は遊園地がある。）

満州国皇居を訪問した。玉座の間や、その前部屋で、満蒙開拓団等を派遣の基礎となった満州と日本との条約が締結された机などは、その歴史を感じる。

以前に訪ねた時よりも整備され、日中戦争の歴史の展示館や、鉄橋下の川から掘り出されたアメリカ製の蒸気機関車の展示が出来ていた。



吉林大学医学部（旧満州国国務院跡） 市中のレストランでの昼食後、吉林大学医学部（旧満州国国会議事堂）に向かった。以前の建物を利用している関係から、各講座は、左右と後方に延びた建物の部分を活用していた。記念にとセミナーの行われる会議室（旧満州国国会会議室）で記念写真を撮った。その後、セミナーを行った。



吉林大学医学部セミナー

吉林大学医学部セミナー
セミナーは、午後 1 時 30
分から、李玉林副学長の挨拶の後に、ハルビンでのセミナーと同じ内容で英語で以下の講演を行ない、3 時 30 分に終了した。



1. 蓮井の” 中国東北地方の鼻 NK/T 細胞性リンパ腫” (40 分) : Nasal NK/T-cell lymphomas in the northeast region of China (Kazuhisa Hasui (1), XinShan Jia (2), Jia Wang (1,2), Suguru Yonezawa (1), Shuji Izumo (1), Takuro Kanekura (1) Takami Matsuyama (1) , Yoshito Eizuru (1) and Katsuyuki Aozasa (3), 1) Kagoshima University, Kagoshima, Japan. 2) China Medical Univeristy, Shenyang, China. 3) Osaka University, Osaka, Japan)
2. 岡村の” 慢性活動性 EBV 感染症” (40 分) : Chronic active EB virus infection (Takayuki Okamura M.D., Ph.D. University of the Ryukyus Faculty of Medicine Department of Medicine)
3. 佐藤の慢性 EBV 感染の生検例” (20 分) : Epstein Barr-virus (EBV) associated ulcerative enteritis after stem cell transplantation for plasma cell myeloma (E. SATO(1), Y. TASHIRO (1), H. SHIRAHAMA (1), T. OKUMURA (2) and Y. TAKEMOTO (3). 1) Imakiire General Hospital, 2) Seikyou Hospital and 3) Imamura Bun-in Hospital, Kagoshima, Japan)
4. 奥村の”慢性活動性 EBV 感染症の解剖例” (20 分) : Fulminant (fatal) Epstein-Barr virus (EBV) infection of T8+ cells in an adult - Report of an autopsy case - (Teruhisa OKUMURA, (1) Eiichi SATO (1) and Masanari KOMATU (2), 1) Department of Pathology and 2) Department of Internal Medicine, Kagoshima Seikyou Hospital, Japan)

このセミナーには、吉林大学の病理学（主任教授）、第1病院病理主任（教授）、第二病院病理主任（教授）、カナダの引退教授の emeritus Prof. Bill ORR の他に、大学院の修士と博士課程の学生等の参加があり、熱心な質問があった。

李玉林副学長招待の懇親会

夜には、李玉林副学長主催の懇親会が、吉林大学の迎賓館ホテルで開催され、多いに、情報交換を行った。現在の吉林大学の病理学の主任教授は全て李玉林副学長の学生だそうで、最近、病理学の主任教授も日本に留学している所を、主任教授として招聘されたそうである。

emeritus Prof. Bill ORR は、バンクーバーに住まわれているそうであるが、長春に私邸を持ち、毎年3ヶ月程、長春に滞在して、李玉林副学長と共著で本を執筆中であり、病理診断のコントロールと学生の論文の英文校正に当たられているそうである。セミナーでは、emeritus Prof. Bill ORR は非常に的を得た質問をして頂き、セミナーの意義を高めて頂いた。また、今回のこのセミナーの企画を高く評価して頂き、また、英語もそれ程悪くはないとお世辞を頂いた。

懇親会からホテルに戻ると、丁度、榮鶴義人教授は大連経由で到着されたところであった。ホテルのバーにて、野添、玉利、奥村、蓮井、榮鶴で合流を祝した。

4、吉林（9月5日）

旅行5日目は、瀋陽への移動日であるが、その途中で吉林を訪問することにした。当初は、吉林の病理関係施設の訪問を計画してい



たが、賈心善教授との打ち合わせにて、吉林にある大学とも、病院とも、連絡付けずに、吉林は、同行している鹿児島の方々の吉林生まれの方々（野添、玉利、川崎）の意向に従い、その生家等の場所確認に留めることにした。

午前8時30分には、バスで、吉林に向かった。午前10頃に吉林に到着。吉林では70%が満族の人々であり、複数の大学を統合した北華大学があることが判明した。統合されたばかりとの由。今後、満族に特有な病気等の検索では、この大学の医学部の病理への連絡と訪問が有用であることが判明した。

吉林市内に、上記の吉林生まれの方々の生家の場所を同定できたそうであり、吉林の古い記録写真集から、戦前の日本人の住宅が吉林の城壁の外に建設されていたことは判明したそうである。この点から、吉林と長春で外科を開業していた野添良隆先生の父君（野添家には、シーボルトの手術機具が伝わる。）が、皆仲良く暮らしていたのだが、”日本人の住居等が、中国の住民の住居等を奪ったり、破壊して建設された”と巷で噂されて、心外であったと語られていたことを、理解できたそうである。

吉林市内の漢族と満族の食事を出すレストランにて、昼食をとり、午後2時に、今日の宿泊地である瀋陽に向かった。午後6時過ぎに、瀋陽市に到着し、夕食を市内のレストランにて食べ、ホテル（瀋陽/新世界万怡酒店）にチェックインした。

5、瀋陽（9月6-7日）

旅行6日目（9月6日）の公式な日程は、夜の中国医科大学主催の遼寧賓館（旧大和ホテル）での懇親会であったので、それまで、瀋陽の旧跡を訪ねた。8時40分に専用バスにて出発し、故宮、張学良私邸を訪ねた。

瀋陽故宮：瀋陽の故宮は、満州族の一つである女真族が、東京（現在の撫順の近く）に建国した後金の都が遷都して、その後清朝を開き、北京に遷都するまでの故宮である。現存する中国の2つの故宮の一つである。今回、皇帝を意味する龍の飾りに青色が用いられるようになったがこの時期からで、この青色は満族の色だそうである。



従って、清朝以外の皇帝のものには青色は用いられていないそうである。

張学良私邸：満州国皇帝から張家に送られた龍の飾りのある衣装（旧日本軍の兵士に持ち出されたいたものが返還され、展示されていた）が展示されていた。張学良私邸は、日中戦争勃発の柳条湖事件で瀕死の重傷となった奉天系軍閥の首領の張作霖が過した小青楼が清楚な雰囲気を持っている。その後の張学良の権力奪取の楊常事件現場となった会議室も見られた。



昼食は餃子専門店にて摂った。美味しかった。

午後は、遼寧省博物館を訪ねた。国立の博物館では、全国の博物館同士で陳列資の交換が行われていることから、必ずしも、遼寧省出土の物とは限らないそうである。今回は、陶器や漆器の2階のフロアを見学した。休憩時には、民芸品の玉の彫物や鳥の羽による絵画を見せて頂いたが、少々、高額のを、今回もこの種の買い物は控えることにした。



新世界万怡酒店のロビーの喫茶コーナー ホテルに戻り、懇親会まで少し休憩した。

懇親会

懇親会は、遼寧賓館（旧大和ホテル）で6時から始った。

中国医科大学からは、第5回国際分子病理学シンポジウム（鹿児島）に参加された書記で副学長の載万津(Wanjin Dai)教授、基礎医学院の院長の柏教授、教育関係と疫学関係の教授に、賈教授が参加した。載副学長の歓迎の挨拶の後に、佐藤名誉教授の挨拶が続き、榮鶴教授（副学長）の紹介があり、その後、私たちの研究の経緯と研究費獲得により、今

後4年の研究計画である旨を説明した。

懇親会の最中に、私たちが、ハルビン医科大学と吉林大学医学部でセミナーを行って来たところであることから、載副学長からは、中国医科大学の設立の経緯の説明があった。中国医科大学は、西安で、軍事医科大学（中国工農紅軍衛生学校）として設立され、その後、北京、ハルビン、長春と移動し、瀋陽にて、満州帝国医科大学とキリスト系医科大学（盛京医科大学）を合併して、現在の姿が確立されたそうである。従って、ハルピンと長



春の医科大学は、元は同じ大学であったそうである。また、現在の中国の医科大学の中では、中国医科大学は3番目に位置付けられているそうである。また、吉林に見かけた北華大学は、吉林市の3つの大学を一緒に、吉林市の大学として設立されたとのことであった。

次回の国際分子病理学シンポジウムの開催に関する話題で、現在、中国国内のチベット旅行熱にて、ラサと西寧での開催の提案があった。西寧の青海大学の副学長の格日力教授は、佐藤榮一名誉教授の学生である旨を説明すると、載副学長より、青海大学とラサ大学の学長は中国医科大学の卒業生であるとの説明があった、本格的に、来年の西寧とラサでの第6回国際分子病理学シンポジウムを計画してみる必要が生じたようである。

また、この懇親会の会場である遼寧賓館（旧大和ホテル）は、各国の元首クラスの要人や皇室関係者が、戦前と戦後も滞在したことがあり、現在は、旧跡としての保存とホテルとしての改修を終えた所である旨の説明もあった。懇親会は、友好的な雰囲気の中で8時過ぎに終了した。

懇親会後に、鹿児島を訪ねたことのある張さんを入れて、有志による二次会で、瀋陽市のカラオケ店で二次会を行った。

中国医科大学

(旧満州帝国医科大学)

旅行7日目(9月7日)
の日程は、中国医科大学での午前中のクローズドの研究打ち合わせと午後の日中病理学シンポジウム

である。午前中9時頃にホテルを出発し、中国医科大学の基礎医学院(旧満州帝国医科大学の校舎)の玄関と会議室(教授会室)にて、記念写真を撮った。



研究打ち合わせ

研究打ち合わせ 午前10時から、基礎医学院の会議室(旧満州帝国医科大学教授会室)で研究打ち合わせを行った。

1. 榮鶴教授の発表(ペルーの胃癌におけるEBVの種に関する検索経験)(王先生の通訳)
2. 岡村先生の講演(馬先生の通訳)



上記の1)と2)は、日本語

から中国語への通訳者との打ち合わせの為に行われた。

3. 賈教授の大学院学生の曲先生の中国での伝染性単核症の文献的検索では、中国でも、最近になって、2例の慢性活動性EBV感染症の小児例の報告が2例、天津からあることが判明した。今回は小児例の検討にて、成人例の報告例の検討と中国医科大学での実情の把握は今後の課題となった。
4. 馬先生の気管支幹細胞の研究の報告があり、討論を行った。馬先生は、今後、大阪大学の仲野教授の所に1年間留学する予定とのことであった。

中国医科大学の碑

昼食は遼寧賓館の日本食レストランにて食べた。大学の構内に、毛沢東の碑文と中国医科大学の設立の経緯を説明する碑があった。



第2回日中病理学シンポジウム

午後1時半から3時半まで、基礎医学院の会議室(旧満州帝国医科大学教授会室)で日中病理学シンポジウムが開催された。

日中病理学シンポジウムの挨拶の予定であった王病理学主任教授は、丁度、遼寧省の教授昇進検査と大学病院の衛生検査(責任者)の為に、出席できずに、賈心善教授が開会の挨拶を行った。



1. 蓮井(王嘉による中国語への通訳)の”中国東北地方の鼻NK/T細胞性リンパ腫”: Nasal NK/T-cell lymphomas in the northeast region of China (Kazuhisa Hasui (1), XinShan Jia (2), Jia Wang (1,2), Suguru Yonezawa (1), Shuji Izumo (1), Takuro

Kanekura (1) Takami Matsuyama (1), Yoshito Eizuru (1) and Katsuyuki Aozasa (3), 1) Kagoshima University, Kagoshima, Japan. 2) China Medical University, Shenyang, China. 3) Osaka University, Osaka, Japan) (30分)

2. 榮鶴(王嘉による中国語への通訳)のペルーでのEBV関連胃癌のEBV種の検討: Distribution of Epstein-Barr virus (EBV) strains in EBV-associated gastric cancers (Eizuru Y, Koriyama C, Akiba S, Corvalan A, Carrascal E, Division of Persistent & Oncogenic Viruses, Center for Chronic Viral Diseases Graduate School of Medical and Dental Sciences Kagoshima University, Kagoshima, Japan) (20分)
3. 岡村(賈心善による中国語への通訳)の”慢性活動性EBV感染症” Chronic active EB virus infection (Takayuki Okamura M.D., Ph.D. University of the Ryukyus Faculty of Medicine Department of Medicine) (30分)

- 4.佐藤（曲による中国語への通訳）の慢性 EBV 感染の生検例” 形質細胞腫治療のための幹細胞移植後に起こった EBV 関連出血性潰瘍性小腸炎（佐藤栄一、田代幸恵、白濱浩 1、武元良整、宇都宮興 2、奥村晃久 3. 1 鹿児島市今給黎総合病院、2 鹿児島市今村病院、3 鹿児島市生協病院）（20 分）
- 5.奥村（馬による中国語への通訳）の”慢性活動性 EBV 感染症の解剖例” Epstein-Barr virus (EBV) の T8 細胞 への感染により劇症経過を示した成人剖検例（奥村晃久(1), 佐藤栄一 (2), 小松真成 (3). 1) 総合病院 鹿児島生協病院 病理科. 2) 同上 顧問 3) 内科) (20 分)

打ち上げ懇親会と馬先生(馬先生の長男)

午後 6 時から、宿泊ホテルにて、賈教授夫妻を招待して、懇親会を行った。今回の旅行に関して、吉林生まれの野添先生、玉利先生、川崎さんの思い入れは相当なものがあったが、その目的を十分に達



せられたようである。また、日高先生のジャーナリストとして、このような機会の大学の活動の情報公開が期待されるとの激励の言葉を頂いた。

その後、8 時半ことから、榮鶴教授と研究生であった中国医科大学の馬先生（現在、中国医科大学第 2 病院耳鼻科教授）との面会に同席した。

どうにか、今回のハルピン医科大学と長春の吉林大学医学部のセミナーは、中国初の所謂アメリカ型のセミナーの開催であり、研究の進行に関して、参考となる情報がたくさん得られた。中国医科大学での研究打ち合わせと第 2 回日中病理学シンポジウムは成功裏に終了した。

6、帰国（9月8日）

帰国は、8 時 25 分発の CZ643 便とあり、5 時起きとなった。ホテルもサービスで朝食レストランを 6 時から開けてくれた。チェックアウトを済ませて、6 時 40 分に専用バスにて、瀋陽空港に向かった。CZ643 便は定刻に出発して、正午前に福岡空港に到着した。

空港からはタクシーにて、博多壁に向かい、午後 3 時 30 分発のリレーつばめと新幹線つばめにて、午後 4 時前に鹿児島中央駅に到着した。